

二〇一三年度 卒業論文

現代と浄土真宗

—人間にとって宗教とは—

L108008

寺本志織

序論

わたしには「宗教の意味」を考えるようになった最初のきっかけがある。それはわたしが十五歳の時に経験した祖父の死である。それまでに親族の死を経験したことがなかったわたしにとって、とても大きな出来事だった。突然のこともあり、わたしは祖父の死をなかなか理解することができず、悲しみは少しも薄れることはなかったのだが、その悲しみはいつしか「死」について考えるきっかけとなり、「宗教」について考えるきっかけとなった。死してなお、祖父がわたしに働きかけてくれているのだとも思えるようになり、今日まで「宗教」に対しての疑問を大切に心にとどめてきた。

祖父の死から疑問に思い出したことは主に二つあり、一つ目は「宗教とは何なのだろうか」ということ、二つ目は「浄土真宗の僧侶の役割とは何なのだろうか」ということだ。「宗教とは何なのだろうか」ということについては、どこからどこまでが宗教で、どこからが宗教ではないのかという意味も含まれている。つまり、宗教と宗教ではないものの線引きがわからないということだ。「浄土真宗の僧侶の役割とは何なのだろうか」ということについては、言葉の通りである。なぜそのように思ったのかと言うと、祖父の死を経験するまでのわたしの僧侶のイメージは、悲しみに暮れている親族に対して、少しでも悲しみを薄れさせられるように接することだと思っていた。しかし、わたしの悲しみはいつまで経っても薄れることはなく、絶望感を覚えるほど祖父の死を受け入れられずにいた。結局、悲しみに暮れている人にとって、どんな言葉も心に入って来ないのだという考えに至って

しまい、「僧侶の役割」について考えるようになったのだ。

わたしは現在浄土真宗本願寺派の一僧侶である。また、教師の資格もいただいている。これから歩む僧侶としての道では、「僧侶の心得」にもあるように勉強布教を怠ってはならない。また、浄土真宗に対する信仰心は必要不可欠である。しかしそれにも関わらず、わたしは未だに「宗教」に対してのさまざまな疑問を抱えている。「自信教人信」という言葉があるように、わたしは自ら信じていないことを門信徒の方々に教えて信じさせることはできない。むしろ自らが信じていないことを教えても門信徒の方々は信じてはくれないだろう。僧侶として人生を歩むためには、自ら疑問を抱えている「宗教」について少しでも理解しておくことが必要なのである。そもそも「宗教とは何か」、「宗教は何の為に存在しているのか」ということについて考えなければならぬだろう。わたし自身、これまでにさまざまな文献を参考にして答えを導き出そうとしたが、曖昧なままに時が過ぎてしまっている。全ての原因はこの疑問に通じていると考えられるため、さまざまな宗教問題を考えていく上で、まずは「宗教の意味」を自分で納得する必要がある。

今日の日本人における宗教をめぐる問題は、浄土真宗の伝道の場面においても、さまざまな形で現われている。例えば、石田慶和氏が指摘するように、「門信徒さんの聴聞の様子や態度がすっかり変わってしまったこと」や、「多くの僧侶は自らのなすべき布教伝道の内容について迷いを持っていること」など、浄土真宗においても問題は多種多様である。なぜこのような事態になったのだろうか。その背景は何なのだろうか。「宗教とは何か」という根本問題を考えていくために、第一章では「宗教」の定義を考えていく。そしてその「宗教」を信仰する人

が、信仰するようになったきっかけを考察していく。

第二章では、「日本人」に焦点をあてて「宗教」を考察していく。「日本人は本当に無宗教なのか」という問いかけから、日本人にとつての「宗教」のイメージを見出し、「宗教」に対して抱いている恐怖心など、日本人の宗教観の特徴を明らかにしていく。このようなことを踏まえた上で、「日本において宗教はどうあるべきか」ということを考察していく。

第三章では、「宗教」という大きなテーマの中から「浄土真宗」に絞って考察していく。まず、今まさに浄土真宗教団が直面している問題を浮き彫りにし、本来のお寺の役割とは何なのか、現在のお寺がどのような役割として世間から見られているかを考察する。また、理想の僧侶像を具体的に取り上げ、「現代において僧侶はどう在るべきか」について総合的に考察したい。そして第一章、第二章、第三章を踏まえた上で、「人間にとつて宗教とは何か」、さまざまな宗教問題に直面する浄土真宗はこれからどのように在るべきか、僧侶としてどのように時代のニーズに答えていくべきかについて結論づける。

第一章 宗教と人間

第一節 宗教の定義

「宗教」とは、一体何なのだろうか。宗教の定義をめぐって、これまで数多くの研究者たちが研究し、議論してきた。そしてその見解はそれぞれ異なっている。したがって、一概に「宗教」と言っても、「宗教の定義は〇〇である」と容易に示すことはできない。宗教の定義を考えることの困難さを、石田慶和氏は、次のような例を用いて指摘している。

例えば、宗教を心理現象と考える宗教心理学の立場では、人間の精神の働きに対応して宗教の本質を捉えようとしています。知性・感情・意志のどれに宗教の成立の場を考えるかによって、主知的・主情的・主意的な定義がそれぞれ与えられるでしょう。「無限なるものを認知する心の能力」とか、「絶対帰依の感情」とか、「永遠の真生命を得んと欲する要求」とか、いろいろな定義が考えられます。あるいは、宗教を社会現象と考える宗教社会学の立場では、宗教は「聖なるものに関する信念と行為であり、それを共有する人びとを結合する社会的事象」と定義されるでしょう。(中略)

このように、宗教の定義は色々の角度から考えることができるのですが、それらを検討して、誰もが承認し得る定義を確定することは容易ではありません。三

このように、「宗教」について、誰もが承認し得る定義を確定することは難しい。

ここで浮上してくるのが、「宗教の定義に正解などあるのだろうか」という疑問である。もし正解があるとするなら、これまでに宗教の定義が統一されているはずだ。逆の言い方をすると、これまで研究されてきたさまざまな立場から考えられた宗教の定義は、正解がない故に現代までにさまざまな意味で語り継がれてきたということになる。しかし、正解のない宗教の定義を、どのように説明すればよいだろうか。

そのことを説明する上で、わたしなりに必ず必要だと考える事項がある。それは「宗教は科学では証明できない」ということだ。この科学主義の世の中で実態のない宗教を説明するには、「科学」と比較することにより最も具体的に「宗教」を説明できると考える。ただし、比較と言っても、「宗教」と「科学」のどちらかを否定するということではなく、「宗教」の必要性を理解するために「科学」との比較を行うのである。

現代という時代を特色づけるものは、何よりも西欧で成立した近代自然科学と、その応用である技術の驚異的な発展である。この成功が無ければ、これまでの文明の発展は無かつただろう。人間が暮らしやすい世の中になつたのも科学のおかげであり、科学への信頼は絶大である。しかし、そんな科学でも、人間存在の根本的な在り方に立ち入ることはできない。例えば、「なぜ人間はこの世に誕生したのか」、「人間は死の恐怖をどのようにやわらげるのか」など、人間存在の意味に関わることについては、科学では答えが出せない。科学は、物を対象とするものでしかない。四しかし人間は、身体、心、魂をもった全体である。科学は身、心、霊より成る人間存在に、生きる指針、どう生きるべきかを与えることはできない。五そのような時にこそ、「宗教」が必要になるのだ。

以上により、宗教の定義には正解が無く、「宗教」は少なくとも人間存在の意味を考えるため、または科学では

証明できない事物を証明するために必要であるということが言える。

第二節 人間の宗教的回心

第一節では「宗教の定義」について触れたが、それを解釈したところで次に問題になるのは、「なぜ人間は宗教を信仰するのか」ということだ。この節では、宗教を信仰する人が、なぜ宗教を信仰するようになるのかという過程を明らかにしていく。

宗教を信仰するにあたって、誰もが必ず「きっかけ」を体験する。わたしの場合、「きっかけ」は祖父の死である。また、その「きっかけ」を体験した後に宗教と出会うことで、その宗教を信仰する。十九世紀末から二十世紀初頭にかけて活躍をした、アメリカの心理学者であるウィリアム・ジェイムズ氏は、宗教体験をする人間には大きく二つのタイプがあると指摘する。一つは「病める魂」の持ち主である。もう一つは「病める魂」の持ち主の対極にある「健全な心」の持ち主である。「健全な心」の持ち主は、世界の楽しい面だけを強調し、暗い面に思い煩うことがないという気質を備え、「病める魂」の持ち主は、むしろ悪を本質的なものととらえ、それが自分の内側にあると考える。「健全な心」の持ち主は、そのまま変わることなく宗教に帰入し、幸福な生涯を送っていく。それに対して「病める魂」の持ち主は、この世を支配する悪や、自らの内側にある罪の問題に悩み苦しむ、そこから神を求め、劇的に神と出会うような宗教体験を経験する。六このように、何か自分の身に精神的な変化が起

このことで、それが思わぬ転機となり、その時に会おう宗教によって人生が大きく変化することがある。

このジェイムズ氏の見解に、島田裕巳氏は難しい問題がつきまとうと指摘する。それは、「その宗教体験が本物なのかどうか、それを証明することが容易ではない」セということだ。

しかしこの指摘にはいささか疑問がある。それは、「証明することが容易ではない」ということがそれほど重要なことである。第一節でも述べたように、宗教は実態の無いモノとして捉えられ、科学では証明できないものである。もとななる宗教に実態が無ければ、宗教体験を証明することも不可能である。また、その必要も無いのではないだろうか。

「きっかけ」を体験した人間の中には、宗教の魅力の虜になり、熱心に信仰しはじめ人間がいる。島田裕巳氏によると、人が宗教の魅力の虜になってしまふきっかけは身近な人の場合が多いと言う。更に、最初から宗教に興味のある人間ではなく、宗教に興味のなかった人間がそのようになる場合が特に目立つ。それまで宗教には格別関心をもっていなかった人間のところに、ある宗教を熱心に信仰している人間がやってくる。信者になっていく人間は、仲間を増やそうとして懸命に相手を勧誘する。この宗教さえ信じれば幸せになれることは間違いない。

そう言つて、しつこいほど誘いをかけてくる。こうした勧誘スタイルをまず思いついてしまふ。 ^ハ

例えば、新興宗教を挙げてみる。新興宗教が盛んになりだしたのは高度経済成長期だと考えられる。様々な機器が発明され、高層ビルが建ち並び、人々が家族のために収入を得ようと忙しい都会に繰り出し始めた頃、上手くいく人とそうはいかない人がいた。上手くいかない人々に手を差し伸べたのが、創価学会などの新宗教の教団だ

った。そうした教団に救いを求めれば、そこには同じ境遇にある仲間を簡単に見出すことができた。それが新宗教の魅力である。信仰というこころの支えができ、同じ信仰を持つ仲間からなる人間関係のネットワークが生まれることで、個人はそれによって励まされ、人生に対して前向きに生きることができるようになる。^九また新興宗教の教えは親しみやすく、わかりやすいが故に抵抗感がないのかもしれない。しかし、ここで注意しなければならぬのは、信仰している宗教に浸かりすぎてしまうのも良くないということだ。

新興宗教の中の一つの例として、オウム真理教を取り上げてみる。オウム真理教は最終的に無差別大量殺人に行き着き、テロ集団としての性格をもつようになった。このような経緯に至るということは、創始者である麻原彰晃氏への支持が絶大なものであったからだとも言える。なぜ、麻原氏に多くの人が惹かれたのか。その理由の一つは、麻原氏が人々に生きがいを与えたからだと考えられる。信者になった人の多くは真面目で純粋であり、そして世間の常識、価値観に違和感を持っていた。信者たちの多くは、なぜ自分は生まれたのか、生きるということはどういうことかを問い、世の中の不正、不平等に怒り、世のため人のために自分は何ができるのだろうか、と悩み、自分を高めるために努力してきた。しかし周りにいる多くの人はそんなことに関心が無いため、心を聞いて話し合うことができなかった。しかし、オウム真理教はそうした悩みを答えを与え、何をすべきかを教えてくれた。それはまず自分自身が修行して解脱し、そして解脱する人が一人でも増えれば世の中は変わっていく。そのようにすることによって人々を救済できるということ、麻原氏は教えていた。このように生きがいを与えてくれ、充実した日々をおくることのできる道を示してくれた麻原氏に、絶対的な信頼を持つようになったわけ

だ。そしてサリン事件などにオウム真理教が関与していると明らかになった後も、なぜ教団を脱会しないのかという理由も、生きがいということではないだろうか。自分の生きる道だと信じていたものを捨ててまでオウム真理教の信者になったのに、脱会をした後、どのように生きていきたいのかわからない元の状態に戻らなければいけないことへの抵抗感がある。

このように、熱心に宗教を信仰する信者たちの多くはその宗教に魅力を感じ、それを心の拠り所として人生を歩んでいる。例としてオウム真理教を挙げたが、信仰している宗教を心の拠り所としているのは他の新興宗教を信仰している信者でも共通して言えることである。

第二章 現代を生きる日本人と宗教

第一節 日本人の宗教観

現代に生きる日本人はさまざまな書物、メディア、あるいは社会の現場で無宗教だと言われている。この原因は、ただ単に宗教から離れているということではなく、「宗教」の存在意義がわからなくなってきたことに近いと考えられる。宗教は何の為に存在しているのだろうか。そもそも宗教とは何なのだろうか。このように、宗

教は必要ない、もしくは宗教を信じていないと答える大半の人たちは、宗教に対して興味が無いか、宗教が何なのかわかっていないのだと考えられる。しかしながら、日本人は別段、宗教が嫌いなわけではない。宗教が嫌いでない証拠に、日本には数多くの宗教団体がある。参考資料の図一〇から、日本人は必ずしも一つの宗教を信じているとは限らず、家族単位ではなく個人単位の宗教信者が多くいることがわかる。だいたい日本人の多くはむしろ宗教心は豊かなのである。ただ、宗教心を「特定の宗教」に限定されることに抵抗があるのだ。二このことは、日本人は必ずしも一つの宗教を信じているとは限らないという証拠の裏づけができる。それぞれの宗教の良いところだけを、自分の都合の良いように気軽に信仰する。それが現代の日本人の宗教信仰スタイルと言える。また、「無宗教」だという人の中には、宗教が恐ろしいから宗教に近づかないようにしているという人も少なくない。宗教にともかくも関心をもたないようにする、それが「無宗教」を標榜させているのである。

なぜ、宗教は恐ろしいのであろうか。たとえば、マスコミを賑わしてきた事件を思い起こすまでもなく、人の弱みにつけこんで、しばしばあり金や財産のすべてを巻き上げるから、ということもある。あるいは、教団という特別な世界に連れてゆかれて普通の生活ができなくなるという心配から、また、教祖と称する人物に自由に操られるという恐怖もある。要するに、宗教とは常識でおしはかることができない得体の知れない世界だから、できるだけ近づかないようにするということになる。二

ひろさちや氏が著した『なぜ人間には宗教が必要なのか』という本に、日本人の宗教心の特徴が書かれている。

「なぜイスラム教徒は、豚肉を食べないのですか？」

とよく訊かれます。そういう質問を受けたとき、わたしは、その方に問い返します。

「なぜ日本人は、金魚を食べないのですか？」

すると、みな「ああ、そうですね。たしかに日本人金魚は食べませんね」とこたえます。「金魚は観賞用だから食べない」という人もいますが、日本人が金魚を食べないのは、要するにみんながそうしないからだと思います。赤信号、みんなで渡れば怖くない。これが日本人の「ものの考え方」であり、日本人の宗教に対する考え方だと思います。

ところが、イスラム教徒に、「なぜ豚肉を食べないのですか？」と訊けば、彼らは、

「そのように、『コーラン』に書いてあるからだ」

とこたえます。(中略)

『コーラン』とは、神の啓示(人間の知恵が及ぶことのない神秘を、神が人間にあらわすこと)の書です。『コーラン』に書いてあるということは、「神が命じておられる」ことなのです。

だから、彼らには、「わたしたちには、神が命令される意味など知る必要がない。いや、知ってはならない」という意識があります。さらには、

神の命令に対して「なぜ」と問うこと自体が、神に対する反抗になるとさえ考えています。

この抜粋した文章から、いかに日本人は無難思考なのがわかる。また、イスラム教徒（他の一神教徒もそうだが）は、他人はどうであれ、自分という個人が神との契約によってそれを厳格に生きていく様子がみられる。ひろさちや氏が述べるように、日本人は他人がやっていることなら安心する横関係である。反対に、一神教徒と神の関係は縦関係であり、神に疑問を持つことは許されないのだ。

わたしたち日本人からすれば、一神教徒のように書物に書かれてあることをまともに信じ、行動することはまずできない。しかし、一神教徒にとって、それは普通なことであり、逆に日本人の考え方に疑問を持つだろう。自分が生まれ育った環境によって、人間の宗教心はそれぞれ異なってくる。例えば、わたしの場合、自分が生まれた家がたまたま浄土真宗のお寺だったため、浄土真宗を信仰している。もし仮に、わたしが生まれた家がキリスト教を信仰している家なら、キリスト教を信仰していたと思う。故に自分が生まれた家の宗教というのは、とても重要だと考える。

さらにわたしは、宗教の本質から考えても、日本人は宗教を信仰しにくい状況下にあると考えられる。宗教の本質は誰かが求めた「救済」に対する救いから始まるものと考えられる。この救済は、求める人の都合なので、多くの人から支持されたものが、宗教として認知されている。さらに、宗教は集団による安心、神に守られている安心、人生に迷うことがないという安心を与えてくれる。また、生きる上で感じる全ての不安や恐怖から逃れるための精神的な術を教えてくれるものだ。信仰深い地域は情勢不安定や後進国である事が多く、生命の危機に

窮する事も少なくない。それらの不安から逃れるには宗教が必要なのだと考えられる。宗教の基本は信仰と安心の享受から成り立つ。よって平和で高度な医療の発達した現在の日本人は無宗教な人が多いのだと考えている。

第二節 日本人における仏教の位置づけ

近代から現代にかけて、日本における宗教は後退している。特に仏教は盛んだった時期に比べ、さまざまな問題を抱えるようになったのは明らかである。上田紀行氏は現在の仏教の実態について次のように語る。

現在の日本で仏教のいちばん悲惨なところは、人々から何も期待されていないところだ。期待するに足る存在だとすら思われていない。「どうせこんなものだろう」とあきらめてしまっている、というか、最初から期待感がないので、あきらめすらないというべきだろうか。

期待もされていないから、本質的な批判もなく、自分たちを問い直す契機もない。期待もされていないから、優れた人材も集まらない。期待もされていないから、その期待に応えようと努力もしない。期待もされていないから、自分たちが何をしているのかの情報公開もない。

こんな状態が続けば、日本の仏教は早晩死ぬ。これだけ期待もされず、しかしそれをいいことに、改革も努力も放棄してのうのうとしているのであれば、状況は絶望的だ。最初から感性の鈍い人間たちが集まって

いる業界なのかもしれないが、この状況にしてなおかつ新しい動きが出てこないのでは、寺の仏教は既にその使命を終えたといってもいいし、諸行無常、滅びて当然だろう。一三

この部分だけでは全ての人々が期待をしていないように聞こえるが、私は期待をしていてくれる人も少なくともいるように感じている。それは仏教を心の拠り所として、本心で仏教を必要としてくれている人だ。しかし仏教はそれらの人々がいるのにも関わらず、衰退しているのが現状である。

わたしが今の仏教に足りないと考えるものは、仏教を広めようとしていることばかりに目がいつてしまいがちで、仏教を必要としている人々に対しての対応が少しおぎなりになっているように感じていることだ。今いる門信徒の方々のご縁を大切にしていくべきではないだろうか。

極論ではあるが、わたしは宗教を必要とっていない人々に対しての対応はしなくても良いと考えている。それは宗教を必要としてくれている人は、おのずからやってくると考えているからだ。全てはご縁であり、宗教を必要だと思っていない人々への対応を考えるより、現在宗教を心の拠り所として必要とされている人々の方にもっと目を向けて真剣に考えるべきではないだろうか。仏教が期待されていない現状は事実であるが、その原因として門信徒の方々に対しての対応が不十分だったということも一因にあるのではないかと考えられる。

第三章 浄土真宗の可能性

第一節 浄土真宗教団の危機とお寺の役割

浄土真宗教団は、これまでに無い最大の危機を迎えている。『今、ここに生きる仏教』という著書の対話の中で、大谷光真氏は次のように語っている。

目に見えますのは、教団という形をとった組織としての危機です。私は浄土真宗に限らず、仏教の本質は人間から人間に伝わるものだから、組織という形がなくても人間さえいれば伝わると思っています。ですから社会としての必然性という必要性がないと教団は成り立たない。つまり抽象的な教えや信仰、真実というところでだけでなく、いろいろな方々が社会として必要な組織だと思ってくださいと教団は成り立たない。そういう面からいうと非常に危機になっていると思います。さらに教えという面でも、浄土真宗はかなり難しいですね。教えの根本に他力の救いということもありますが、他力ということが現代人には通じにくいし、救いということもわかりにくい。こちらはかなり厳しい事態に直面していると思います。一四

このように、浄土真宗本願寺派のご門主本人が語られているということは何よりも説得させられる上に危機を感じます。

教団の危機が実際にわかる例として、具体的には序論でも述べたように「門信徒さんの聴聞の様子や態度がすっかり変わってしまったこと」などである。また、お寺に人が来なくなつたのも事実だ。目に見えてわかる変化ほどわかりやすいものはないが、これほど辛いものはない。

本来のお寺の役割としてみんなが集う場所としての意味があつたが、現代ではそのような意味ではお寺は通用しない。それは第二章でも述べたように、宗教に対する恐怖心などさまざまな要因があつての結果である。お寺に関するイメージとして、例えばわたしが中学三年生の時に同級生に言われた「人が亡くなればお金が入る」という言葉がある。わたしの家は「死」で食べていたのだということを思わされた。祖父と父は立派なことをしていると考えていたわたしにとって、それはあまりにも衝撃的な言葉だつた。世間の人々の目に映るお寺とはそのようなものだつた。わたしのようにお寺に生まれた者は、お寺で行う行事やお寺の役割については自然と理解してくるものだ。しかし、それはお寺に生まれた者のみの感覚であり、お寺に生まれなかつた者のお寺や僧侶に対する考えは、こんなにも大きな差がある。しかし、全ての宗教が恐ろしいわけではないし、お寺のことをよく知らないのに偏見を持ってほしくは無い。「お寺」とはどのようなところなのかを知って欲しい。そのためには、まずお寺に来て実際に目で見て宗教を感じてもらいたいと考える。

お寺に来てもらうには、お寺を開けておくことが一つの手段としてある。だがこれには相当なリスクがある。いつ何が起こるかわからない上に、物騒な世の中だとも言われている。しかし、お寺を開けないことにはお寺のイメージは一向に良くなるらない。閉ざされているという現代のお寺のイメージを打破するためには、やはりお寺

の扉を開けておくことで少しは改善されるのではないだろうか。扉を開けておくと言っても、二十四時間ずっと開けておくわけでもないし、全ての扉を開けておく必要もない。扉を開けて網戸にしておくのもよし、センサーを付けておいて誰かがお参りに入って来られた場合に気付きやすくするのも良い。このように、少しの工夫だけでお寺のイメージはだいぶ変わってくると考えられる。しかしこれは門信徒の方々に対しては効果的かもしれないが、門信徒の方々意外の人にはもっと違った、思い切った対策が必要だ。

高橋卓志氏によると、魅力がなければ、面白くなければ、何か持ち帰るものがなければ、人は集まらないものだと言う。^{一五} 時代は変わっていくと同時に、お寺もそのニーズに合わせて変わらなければ人は集まらない。そのニーズに合わせた上で、僧侶には何ができるのだろうか。^{一六}

第二節 見習うべき人物と僧侶の在り方

現在、浄土真宗の多くの僧侶は、自らのなすべき布教伝道の内容について、迷いをもっているように思う。何をどのように伝えればよいのか、自分が納得できることと、伝道的に伝えなければならないとされていることとの落差に、大きなとまどいを感じているのではないだろうか。^{一六}

今の僧侶に足りていないものとして、様々な経験、社会に対して積極的に貢献していこうとする姿勢が挙げられる。また、お寺の仕事だけをしていればいいという感覚があるように感じられる。これらの影響として、上田

氏が指摘するように「お坊さんは何もできない」職業なのだと世間では思われている。しかし、「何もできない」のではなく、「何もしない」からそう見えるだけなのだ。一七 何をすべきかわからないからと言って、自分には何もできないと思ってはならないのである。では、実際にどのような僧侶像を目指せば良いのだろうか。

わたしが僧侶として見習わなければならぬと考えているのは、民衆に対する親鸞聖人と蓮如上人の心掛けだ。親鸞聖人の姿勢として見習うべきだと考えているのは「親鸞は弟子一人ももたず候」一八とおっしゃっていることだ。これは、親鸞聖人はこれらの人たちを自分の弟子だとは決して思っていないからなかつたということだ。これらの人たちは、親鸞聖人から教えを聞いて後生の一大事を知り、聞法しているように見える。しかし、それには見える光景としてそのように見えるわけであり、本当の意味は少し違う。これらの人たちが真剣に聞法しているのは「阿弥陀仏」の働きであり、親鸞聖人の力でも計らいでもない。親鸞聖人の力や計らいで弥陀の本願を信じ念仏するようになった人たちならば、親鸞聖人の弟子と言えるが、阿弥陀仏のお力によって救われた人たちであるため、親鸞聖人は私の弟子などというものではないとおっしゃったのだ。共に阿弥陀仏の願力によって救われる御同朋なのであり、決して師匠と弟子という関係ではないのであるという親鸞聖人の御こころを表したのが、「親鸞は弟子一人ももたず候」というお言葉なのである。このように数多くの門弟や門信徒の方々に対し、あくまでも自分は他のの方々となんら変わりのない、一人の人間であるということ常に念頭に置かれていたことで、その気持ちの数多くの民衆の心に留まったことで、親鸞聖人は人々に支持されていた。

蓮如上人の心掛けに関して、梯實圓氏によると、蓮如上人は出来るだけ短く、肝要にお話をするようにと注意

されていたそうだ。また、できるだけ民衆に伝わりやすいように、わかりやすい言葉を選んでいたとのことだ。信者が集まって話し合う場を設け、それが村々で結成され、そこで蓮如上人の御文章が読み上げられる。この場によって、多くの人々に読み聞かせることが出来た。当時は識字率が低く、文字が読めない人が多かったのである人が読み聞かせることによって教えが広まったのだ。また、蓮如上人は次のように平座で聴衆の方と同じ視線で説法をされていた。

仰せに、身をすてておのおのと同座するをば、聖人（親鸞）の仰せにも、四海の信心の人ひはみな兄弟と仰せられたれば、われもその御ことばのごとくなり。また同座をもしてあらば、不審なることをも問へかし、信をよくとれかしとねがふばかりなりと仰せられ候ふなり。一九

このように平座にすることで、民衆に親しまれやすくするように工夫された。さらに本願寺に参詣された御門徒に対しては、次のようにある。

御門徒衆上洛候へば、前々住上人（蓮如）仰せられ候ふ。寒天には御酒等のかんをよくさせられて、路次の寒をも忘れ候ふやうにと仰せられ候ふ。また炎天の時は、酒など冷せと仰せられ候ふ。二〇

このように蓮如上人は門徒の道中の疲れを癒し、少しでも真剣に聞法ができるようにと、寒い季節には温かいお酒や雑煮を、暑い季節には冷酒でもてなされている。当時の時代背景から考えてそのような型破りの行動はあまりにも衝撃であるが、それがかえって人々のこころを驚ぶかみにしたのだ。

親鸞聖人と蓮如上人以外にも、わたしは有馬実成氏という一人の僧侶を見習いたいと考えている。有馬氏は浄土真宗の僧侶ではなく、曹洞宗の僧侶として生きた人物だ。有馬氏は幼い頃に戦争を体験し、父親の死去、朝鮮人との間に起きた人種差別、米軍兵から受けた屈辱など、様々な辛い体験をした。このようなことから、自坊の跡継ぎとなることを自ら懇願し、僧侶としての人生を選んだ。しかし、そんな有馬氏にも僧侶になることに葛藤を感じていた時期もあり、カトリックやキリスト教などを学び、「宗教とは何なのか」という疑問を持つようになった。また、大学を卒業した後、自坊に帰ったが、寺の機能は麻痺しきつていたことを初めて知り、寺の状況に関して無知であったことを思い知らされ、そこから有馬氏の僧侶としての道が拓かれることとなった。有馬氏は寺の再建のために寺報の発行や子どもたちの寺子屋、夏休み子ども塾、本山への団参など、様々な行動を起こして、門信徒の方々や地域社会との関係性を築きあげていった。さらに名僧と言われた澤木興道老師を招いたり、「禅の文化をきく会」を結成して勉強会や文化活動を行うなど、寺はますます活性化していった。

上田氏によると、有馬氏は出会った人をその気にさせてしまう魅力があったと言う。有馬氏は出会った人々のご縁を大切にし、縁起は説くものではなく、生きるものだとしめしたのだ。三有馬氏の起こした活動に参加した人々は、最初はしぶしぶだったかもしれない。しかし、徐々に参加する人が積極的になっていく姿

勢が見られたと言う。有馬氏の必死な姿が人々の心を動かしたとも言える。

以上三人の見習うべき人物を紹介した。これらの人物から学び、僧侶に必要なものの大前提として考えられるのは「信仰心」だと考えられる。これは僧侶だけではなく、他の宗教のクリスチャンであれ同様に言えることだ。そして次に必要だと言えるのは「傾聴の姿勢」だ。僧侶が人間関係を築いていくには話術も必要だが、まず人の話に耳を傾けることが必要である。人の話を聞くには以下の三つが特に重要だと考えられる。一つ目は「相手と目の高さを合わせる」、二つ目は「相手のテンポに合わせる」、三つ目は「相手の目を見る」だ。また、大事なことは相手の気持ちを完全に理解することは不可能なので、無理矢理わかろうとしないことだ。そして相手の望む解決や打開策を答えるのではなく、共に考え、相手の望む方向へと導く手助けをしていくと考えることが最も重要だと考えられる。また、場面に合わせて僧侶としてではなく、一人の人間として、ご門徒の方々や地域の方々と向き合う気持ちも無ければならない。

『がんばれ仏教！』の中で上田氏が紹介している南直哉氏は、僧侶には「発心」が必要だと語る。そして発心の前提として、今の自分の有り様や生き方に対する疑問、これでいいのかという「問い」がないと、発心に結びつかないと言う。また上田氏は、それらを持っている僧侶が仏教の可能性を開いていくのだと語る。三

そして、わたしが特に僧侶が持つべきものとして重要だと考えるのは、僧侶としての「自覚」だ。僧侶という存在は、宗派によっては多少の違いはあるものの、世間において苦しむ衆生の救済を旨としているわけである。しかし、自覚的に衆生の苦しみに寄り添うことをせずとも、僧侶としてやってこれた人々もいたという側面があ

るのも、おそらくは事実だろう。僧侶としての「自覚」が足りないが故に、今日のように「葬式仏教」と呼ばれる結果になったのではないだろうか。「自覚」とは、自らを覚ることであり、自分が置かれている立場に気付くことだ。上記のように、自分が何をすれば良いのかわかっていない僧侶もいるだろう。しかし、その問いは問いのままで終わっても良いのだろうか。そのような問いを問いのままで終わらせている僧侶が多いからこそ、仏教は衰退しつつあるのではないだろうか。僧侶は成長し続けなければならぬ。成長する意志を持って、一步を踏み出し、自分の中の軸を確立していく。そうした「生きる覚悟」が必要なのだと言える。

結論

この論文では、主に「宗教」という大きなテーマをもとに考察した。序論では、最も疑問に感じている「宗教とは何か」という問いについて、「宗教」の意味を明らかにした上で、それをもとに、現代の日本において宗教がどのような意味合いを持つか、さらにお寺もしくは僧侶はどのように在るべきかということの問題提起した。その結果、各章において次のような結論に至った。

第一章では、「宗教とは何か」という根本問題を考えていくために、宗教の定義づけが必要不可欠だと論じた。

そして考察の結果、宗教について誰もが承認し得る定義を確定することは難しいが、少なくとも「宗教は科学では証明できない」ことを宗教と呼ぶという結論に至った。宗教を説明するには、「科学」を用いることが最も人々に理解されやすいだろう。同時に、科学主義の現代において、宗教よりも科学の方が信用されやすいという実態も明らかになった。しかし、そんな科学主義な世の中でも、宗教は必要とされていることを明らかにすることができた。そして宗教と人間がどのような関係なのかを踏まえつつ、人間が宗教を必要だと思えるようになる経緯や、必要だと主張する人々が集まる集団の特徴を浮き彫りにすることができた。

第二章では、日本人に焦点をあてて考察した。無宗教だと言われている日本人は、実は宗教心が豊かだったり、上下の関係ではなく皆が同じだという横関係の宗教心を持っていることが明らかになった。また、必ずしも一つの宗教を信仰しているわけではなく、自分の都合の良いように気軽に信仰するという信仰スタイルを見出した。そして日本人における仏教というものは、相当厳しい位置にあるということや踏まえ、それでも仏教を心の拠り所として、本心で仏教を必要としてくれている門信徒の方々とのご縁を何よりも大切にしていかなければならないことを結論づけた。

第三章では、今現在浄土真宗が教団として迎えている危機を、具体的な例を用いて考察した。また、お寺の本来の意味を浮き彫りにし、世間での「お寺」のイメージをもとに、これからお寺はどのように在るべきか、さらに親鸞聖人、蓮如上人、有馬実成氏の三人をお手本として、これからの時代のニーズに合った僧侶像を明らかにすることができた。

わたしは今回の論文を書くにあたって、自分自身について新しく気付いた点があった。それは第三章の第二節で、現代の僧侶は自分がどうすれば良いのかわからない、どのように教えを伝えていくか、多すぎてどれを伝えていけばいいのかわからない状況にあると論じた際に、これは決して他人事ではなく、実は私自身も同じ思いを抱えているということである。わたしは二〇一一年にお得度を受けた後のこの二・三年間、僧侶としての自分を考える際、何だかよくわからない葛藤があった。今回の論文を書いたことで、結局今の自分は考えるだけで、行動を起こせるだけの力も無い人間だったことを思い知らされた。それはとても衝撃的なことであるが、同時に自分がこれから僧侶として歩む道の扉を開けたような気持ちでもあった。また、序論でも述べたように、わたしは「自信教人信」という言葉を強く心に刻んでいる。なぜなら、自ら信じていないことを門信徒の方々に教えて信じさせるようなことはしたくないからだ。しかし、今回自分の知りたかった、あるいは考えたかったことについて問題提起したことで、僧侶としてこれから人々のためにできることは何なのか、何となくではあるが見えたように感じる。論文を作成するにあたり、さまざまな著書を読み、考察してきたことにより、より多くの知識を得た。僧侶としてこれからさらに勉学を励み、自分のできることを一生懸命行動していける人物になりたいと考える。

註

- (1) 石田慶和 『これからの浄土真宗』 本願寺出版社，二〇〇四年 三頁
- (2) 同上 六頁
- (3) 石田慶和 『生きることの意味〜現代の人間と宗教〜』 本願寺出版，二〇〇一年 九六頁
- (4) 同上 七十七頁
- (5) 本山博 『宗教とは何か〜人間に生きる指針を与える〜』 宗教心理出版，一九九九年 一二四頁
- (6) 島田裕巳 『宗教はなぜ必要なのか』 集英社インターナショナル，二〇一二年 五三頁
- (7) 同上 五八頁
- (8) 島田裕巳 『なぜ人は宗教にハマるのか』 河出書房新社，二〇一〇年 一二八頁
- (9) 同上 一三四頁
- (10) <http://www.e-stat.go.jp/SGL/estat/List.do?bid=000001047640&cycod=0> (二〇一四年一月七日参照)
- (11) 阿満利麿 『日本人はなぜ無宗教なのか』 ちくま新書，二〇一一年 八頁
- (12) 同上 二五頁
- (13) 上田紀行 『がんばれ仏教!』 日本放送出版協会，二〇〇八年 一〇頁
- (14) 石田慶和 『これからの浄土真宗』 本願寺出版社，二〇〇四年 一八頁

- (15) 高橋卓志 『寺よ、変われ』 株式会社岩波書店、二〇一〇年 一〇八頁
- (16) 石田慶和 『これからの浄土真宗』 本願寺出版社、二〇〇四年 六頁
- (17) 上田紀行 『がんばれ仏教！』 日本放送出版協会、二〇〇八年 五〇頁
- (18) 『歎異抄』（浄土真宗聖典 注釈版） 六・八三五頁
- (19) 『蓮如上人御一代記聞書本』（『浄土真宗聖典 注釈版』 四〇・一二四五頁
- (20) 『蓮如上人御一代記聞書末』（『浄土真宗聖典 注釈版』 二九五・一三二八頁
- (21) 上田紀行 『がんばれ仏教！』 日本放送出版協会、二〇〇八年 九〇頁
- (22) 同上 一〇一頁

参考資料

<http://www.e-stat.go.jp/SGL/estat/List.do?bid=000001047640&cycode=0>

全国社会教会等(宗団)・教団・信者数														平成23年12月31日現在						
項目	宗教団体					宗教法人					教団				信者					
	神社	寺院	教会	新教所	その他	神社	寺院	教会	新教所	その他	計	異	異(外国人)	女	女(外国人)	計	計(外国人)			
総数	81,389	77,394	32,718	22,289	7,399	221,189	81,211	75,964	23,117	292	1,271	181,855	323,401	2,603	330,896	1,110	654,297	3,713	196,890,529	
系統																				系統
神道系	81,290	18	5,565	1,021	910	88,804	81,131	12	3,581	131	231	85,086	48,380	49	29,054	98	77,434	147	100,770,882	神道系
仏教系	32	77,333	2,195	1,918	3,865	85,543	24	75,911	994	92	400	77,421	167,105	274	165,856	189	332,971	463	84,708,309	仏教系
キリスト教系	—	2	7,234	871	1,174	9,281	—	—	4,130	25	352	4,507	24,764	2,125	4,396	607	29,160	2,732	1,920,892	キリスト教系
諸教	67	41	17,724	18,479	1,450	37,761	56	41	14,412	44	288	14,841	83,182	185	131,580	216	214,732	371	9,490,446	諸教

(注) 教団中()は、外国人教団・信者数で全教団数の内数である。

参考文献

- 石田慶和 『これからの浄土真宗』 本願寺出版社，二〇〇四年
- 石田慶和 『生きることの意味と現代の人間と宗教』 本願寺出版，二〇〇一年
- 本山博 『宗教とは何かく人間に生きる指針を与える』 宗教心理出版，一九九九年
- ウイリアム・ジェイムズ 『宗教経験の諸相』 上 『梶田啓三郎訳』 日本教文社，一九六二年
- 島田裕巳 『宗教はなぜ必要なのか』 集英社インターナショナル，二〇〇四年
- 島田裕巳 『なぜ人は宗教にハマるのか』 河出書房新社，二〇一〇年
- 阿満利磨 『日本人はなぜ無宗教なのか』 株式会社筑摩書房，二〇一一年
- 阿満利磨 『人はなぜ宗教を必要とするのか』 株式会社筑摩書房，二〇〇〇年
- ひろさちや 『なぜ人間には宗教が必要なのか』 株式会社講談社，二〇〇四年
- 池上良正、小田淑子、島菌進、末木文美士、関一敏、鶴岡賀雄
- 『第1巻 宗教とはなにか』 株式会社岩波書店，二〇〇三年
- 山折哲雄 『宗教の話』 朝日新聞社，一九九七年
- バートランド・ラッセル 『宗教は必要か』 『大竹勝訳』 荒地出版社，一九六九年
- 井上順孝 『現代日本の宗教社会学』 世界思想社，一九九八年

- 大谷光真、上田紀之 『今、ここに生きる仏教』 株式会社平凡社、二〇一〇年
- 大谷光真 『愚の力』 株式会社文藝春秋、二〇〇九年
- 上田紀行 『がんばれ仏教!』 日本放送出版協会、二〇〇八年
- 玄侑宗久 『お坊さんだって悩んでる』 株式会社文藝春秋、二〇一〇年
- 高橋卓志 『寺よ、変われ』 株式会社岩波書店、二〇一〇年
- 伊東乾 『笑う親鸞』 株式会社河出書房新社、二〇一二年
- 北原光 『それぞれの蓮如さま聞書』 百華苑、一九九七年
- 阿川佐和子 『聞く力』 株式会社文藝春秋、二〇一二年
- 大泉実成 『麻原彰晃を信じる人びと』 洋泉社、一九九六年
- 柏原祐泉、黒田俊雄、平松令三 『親鸞大系 歴史篇 第十一卷』 株式会社法蔵館、一九八八年
- 梅原隆章 『真宗教団の現代的課題』 永田文昌堂、百華苑、一九六六年
- 浄土真宗教学研究所 『宗教と現代社会』 本願寺出版社、二〇〇三年
- 浄土真宗教学伝道研究センター
- 『自死とわたしたちくさまざまな課題にむきあつて』 本願寺出版社、二〇一〇

|

